
とある弟の大能力

咲魔@テラ駆け出しドンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある弟の大能力

【Nコード】

N3928BA

【作者名】

咲魔@テラ駆け出しドンだー

【あらすじ】

とある転生者の姉をもつ弟は学園都市で暮らしていた。能力は反発力操作。風紀委員に所属。同僚の上条当麻のトンデモ行動に制裁を加える日常を歩んでいくのであった。

とある弟のプロローグ（前書き）

はい、やっちまいました。掛け持ちで多分更新は遅いですが（＾／

とある弟のプロローグ

姉貴、宇都宮咲魔はある日を境に突然いなくなった。理由は不明。その日を境にただただいなくなった。

その日、部活に入ってたかった姉貴は家でゲーム。俺と一緒に買ったゲーム。『ファンタシースターポータブル2』をやっていた痕跡があった。何故かベッドの上にタイトル画面だけついていた。俺は部活帰りで遅くなって学生寮に戻った。

ケータイを開くと20件メールが来ていた19件は母からの電話の留守電であった。一件は姉貴からだった。

母は言った。姉貴がうちに来ていないかと。勿論来ていない。母から告げられた。姉貴が失踪したと。

その後姉貴のメールを見た。そこには、当分会えないとだけあった。

いつの日か聞いたが姉貴はもともと養子らしい。道理で兄弟なのに似てないわけである。でも、そんなの関係無いくらい俺は姉貴と仲がよかった。小学生の頃から取り敢えず姉貴に付いて回っていた。姉貴の友達からも仲がいいねと羨ましがられていた。

まあ、姉貴は活発でいろんな友達がいるから人見知りだった俺としては気恥ずかしかったがな。

姉貴、今ごろどうしているだろうか。家族の中ではもう姉貴の話は禁句になっている。と言っても、学生寮暮らしの俺は関係無い。

俺は姉貴が今も元気に生きていると信じている。

姉貴、俺は学園都市で楽しく生活してるよ。同僚の上条とか、小さい頃ご近所さんだった御坂とかと楽しく…ね。

敦也 side

よう、俺は宇都宮敦也。学園都市のとある高校の学生寮で同僚の上条当麻と暮らしている大能力者：所謂レベル4である。

なぜ大能力者なのに名門に行かないかというその心はただ祭り上げられるのが面倒だからだ。

世間は能力のレベルが権力であるからな。面倒くさがりの俺としてはくだらないとは思っていない。

おっと、能力を言ってなかったな。俺は『反発力操作』だ。正直な話、それがどうしたって能力だ。ただ単に反発力を操作する能力。なんに使うんだよ。

「当麻。」

「ん？なんだ？」

当麻に試し撃ちをする。

ポケットに常備のベアリングを指で弾く。

「おまつ！？つぶねえな！！！」

普通の人間が大怪我する程度の反発力できっかり脳天に撃ち込んだ。面白いことに、右手で防いだ。防いだのだ。

こいつ、上条当麻は無能力者。レベル0である。であるのだが右手には全ての能力による干渉を無効化する能力がそなわっている。

「バカがいたから狙撃した。」

「俺かい！？ああ：お前といいビリビリ中学生といい：不幸だ：。」

こいつはすぐ不幸だって言う。まあ、こいつはとことんツイてない

やつである。

昨日はあの伝説の二千円札を自販機に飲み込まれたらしい。

しかも俺がジュース買ってこいとパシったので俺の金だ。俺もこいつと同僚になってからときたまツイてない。勿論幼少時の姉貴直伝のローリングソバットを脇腹に決めてやったし金も返ってきたのだが。

「美琴か？」

「そーだ。」

美琴：御坂美琴は名門常磐台中学の二年生で、俺の友達だ。あいつは学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）の第三位である。まあ、こっちも必死でレベル1から能力を磨いてレベル4になったのに、美琴は天才だよな。努力の。

「だから今日は一晩明けての帰宅か。なんとも、お前も美琴もあなどれんな。」

「どーいう意味だよ。」

「さてね。じゃ、俺は風紀委員の仕事があるからよ。」

「夏休みなのに大変だな…。」

「風紀委員ジャッジメントをしながらでも、一般教科の点数もそこそ取れるんだから、当麻もちゃんと勉強しろよ。ノルマ宿題な。俺が帰ったときにしてなかったらローリングソバット。」

「うえ勘弁。」

いつてきますと一言。寮を出た。

風紀委員とは、能力者の生徒が学園都市の治安を維持する組織である。まあ、担当は学区内だけだな。

気だるい昼下がりに、俺は風紀委員の第177支部に向かう。

「来たぜ。あ、固法さん。」

「あ、今日は宇都宮君。御坂さん来てるわよ。」

私は出るからと固法さんは出掛けていった。

「おー、三人とも揃ってんなー。」

「あ、宇都宮君。」

「ごきげんよう。」

「今日は宇都宮先輩。」

上から御坂美琴、白井黒子、初春飾利。いつも絡んでいるメンバーである。

「それで？美琴は昨日当麻をよくも追いかけてくれましたねこんちくしょう。寮監にバレないように当麻を部屋に入れてローリングソバットするまで俺の精神の磨耗がマッハなんだが。」

「い…ゴメン。」

「私もお姉様が出ていっているのを寮監から誤魔化すのに大変でし

たのよ。」

と白井がニコニコしながら言った。白井と美琴は同じ部屋のようなだ。

「だ…だってあいつが…。」

「はいはい、人のせいにしない。」

「うー、宇都宮君はいつも私を子供扱いして…。」

「中二はまだ子供だろう。」

もう。と頬を膨らませる美琴にニコニコする三人であった。

「仲がいいんですね。御坂さんと。」

初春が白井と会話してる美琴を見ながら言った。

「まーな。」

素っ気なく返した。まるで、姉貴と一緒に居たときのことを言われているようで…。

「ときに美琴、なんでここに居るんだ？また変なことに首を突っ込んでんのか？」

「いいや、別に宇都宮君には関係無いわよ。」

「ならいーが。」

御坂美琴という人物は取り敢えず事件性のある物事には首をすぐ突っ込みたがる。なら風紀委員ジャッジメントに入れよと言ったが、拒否された。なら首を突っ込むなよ…。

「んじゃ俺はコーヒーでも飲みながら仕事すつかな。美琴。」

「な…なによ。」

「ちったあ俺に頼れよ。お前になんかあったらお前の母さんに申し訳が立たんからな。」

「余計なお世話よ。」

いつもこいつはこうだ、ちったあお兄さんを頼っても良いのによ。まあ、妹達シスターズの情報を流す時季ではないな。場合によっちゃ美琴がいつのまにか知ってる可能性もあるが。

「ならいいんだね。」

俺はパソコンに向かい、風紀委員ジャッジメントの仕事を始めた。この後、上条当麻がとんでもないアホをしでかすことを知らずに。

とある弟のプロローグ（後書き）

つーわけで転生してもうた！！シリーズの外伝てき要素ですかね。
外伝が本編なんて馬鹿なことにならないようにしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3928ba/>

とある弟の大能力

2012年1月10日06時45分発行